

鬼武蔵のオラリオ生活

ただのモブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の身の丈ほどある大きな槍を担ぎ

腰には刀が2本

身長は190ほどある男がオラリオに降り立った

ヘステイアファミリアに所属し敵をなぎ倒す姿はまさに鬼

この物語は鬼武蔵と呼ばれるようになる男の話

目次

第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
44	34	24	15	7	1

第1話

「ここがオラリオか…」

この日オラリオに一人の男が降り立った

「んであれがバベルってやつで…」

身の丈より少し大きい槍を手に持った190近いガタイのいい男
「そんでもってあれがダンジョンか…」

その男の名は

「ギャハッ！楽しみだなあ!!」

【森武蔵】
もりむさし

？

「たく…ファミリアなんてどうやって入んだよ…」

オラリオに来たムサシはあの後ギルドに向かったがそこで

『ファミリアに入っていない方は冒険者には登録できないんですよ』

と言われ

現在自分を入れてくれるファミリアを探している

……のだが

「どこに行っても門前払いかよ…イライラしてきたぜエ…」

この男口も態度も決して良いとは言えないためどこのファミリア
でも受け入れを拒否されてしまっていた

「次は…【ロキファミリア】か…。てことはあのデケエ館か？」

次の行き先を決めたムサシは歩みを進める

？

「おい止まれ」

「あ？」

ロキファミリアのホームである館に来たムサシは入口の前で見張
りの冒険者に止められてしまう

「貴様誰だ」

「あーそういう事かあ。ここロキファミリアだろ？冒険者なりてエン
だがいれてくれねエか？」

と頼んでみたが

「ダメだ！よそ者を入れるわけにはいかない！それに今団員のほとんどが遠征中だ！日を改めて来るんだな！」

と返された

これに対しムサシは

「あ”あ？”

今まで7個ほどファミリアを回ってきたが全てで門前払いをされてきたためストレスが溜まってしまっていた

そんな彼にこのような答えが返ってきたら怒るのも当たり前で

「おいゴリア。喧嘩売ってんのかア？」

「っ！」

「ふざけんじゃねえぞゴリア!!」

見張りの冒険者の横つ腹を槍でフルスイングしてしまった

そして冒険者は数10m吹っ飛んだ

幸い殴ったのは刃やいばの刃はでなく腹だったので死んではない…だろ

う…多分

「たく…」

人を殴ったことでストレスが少し発散されたムサシはまた自分を入れてくれるファミリアを探し出した

？

「クソがア!!」

もう日が暮れる時間

一日中探したが見つからず合計23

これはムサシが訪ねたファミリアの数だ

これだけ行っても門前払いをされ続けたムサシはいつでも人を殺しそうな雰囲気醸し出してる

「どオすんだよ!!」

なんて叫んでいると

「あの…大丈夫ですか？」

「あ？」

「ひっ！」

声のした方向を向いたらそこには

「す、すみません！何か困ってるような感じがしたので…」

白髪の赤い目

印象的には兎のような少年が立っていた

？

「ウヒヤハハハ！俺と同じかよ！」

「わ、笑わないでくださいよ…。ムサシさんだって同じなんですからね」

あの後少し話をして意気投合した2人は並んで街を歩いていた

容姿も性格も正反対と言ってもいいほどの2人が並んで歩く姿は否が応でも人目につくものだ

「あーわりいわりい。んでベルはどここのファミリアに行っただよ？」

「有名どころはほとんど行きましたね。ロキファミリアとか…」

「そこは俺も行ったなあ。門前払いされたけどな……………思い出しただけでもイライラしてくるぜえ…」

「頑張つて抑えてください…」

「それにしてもどこにはいるよ？入れてくれるとこなんてもう無えんじやねえか？……………あ？」

その時ムサシは変な視線を感じた

舐め回すような査定されてるような気色の悪い視線…

(あのデケエ塔からか…)

「そうですね。やっぱりマイナーなどこ探すしか……………ムサシさん？」

「んあ？ああ悪いな聞いてなかったわ」

「ですからマイナーなファミリアに入れてもらうしかないんじゃないんですかって言ってるんです！」

「あーそうかもなあ。まあぶつちやけると俺はどこだっていいしなあ」

「ファミリアにこだわりはないんですか？」

「まあそうだな。どこに行こうが俺は俺だからなあ強くなれりやそれでもいい」

強くなるためにオラリオに来たムサシにとってファミリアは形で

しかなくこだわりはないものだ

「……かつこいい」

「あ?」

「僕、自分に自信が持てなくて」

「自信?」

「はい僕は英雄に憧れてなりたくてここに来たんですけど自信がなくて……笑っちゃいますよね」

「ブツ……ウヒヤハハハ! ああ笑っちゃまうね! そんなの!」

「で、ですよね……」

ムサシの言葉を聞いてベルの顔は曇る

「バカみてえな良い目標じゃねえか!」

「え?」

「お前それなれる訳ないだろとか周りに言われ続けてきただろ!」

「え? は、はい……」

「でもお前はここに来ただろおが!」

「え?」

「周りに流されねえで自分つてものをしつかり持ってここに来たお前はそれだけで夢に一步近づいてるだろ!」

「っ!」

両手を広げ体全体で力いっぱい叫ぶムサシ

「周りに笑われろや! それはなあ恥じゃねえんだ! 今まで歴史に名前が残ってる奴らだって笑われて強くなってるんだ! 偉人や英雄つてのはなそんなバカの集まりなんだよ! 笑われたやつが強くなる世の中だ! お前は自分の夢に胸張れやあ!」

「は、はい!」

その時のベルの顔は晴れやかだった

「うっしやあ! とりあえず英雄になる前に……」

「?」

「ファミリア探すぞ!」

「はい!」

?

(あのガタイがいい男の方…私の視線に気がついてたわね)

バベル最上階

そこには絶世の美女と言つてと過言ではない女が窓の外からオリオを一望していた

(面白い魂の色。純粹な白を持ちそれでいて熱い紅を持っている。ピンクじゃないわね。真っ直ぐでそれでいて戦闘狂の部分もあると言った感じかしら。フッフ…面白いわね。ああ欲しいわ)

「オツタル」

「はっ！フレイヤ様何か？」

フレイヤと呼ばれる女が声をかけるとムサシといい勝負をしそうなガタイを持った大男が現れた

「あの男の監視してきてくれる？」

「しかしフレイヤ様のそばを離れる訳には…」

「外に出る時は呼び戻すわ」

「…：分かりました。では」

そう言つて大男は出ていった

？

「おわ！」

「うわっ！ど、どうしました!?!」

「いやなんでもねえよ。寒気が少しな」

「あーもう夜ですもんね」

あの後探しに探し回つたが見つからず夜になってしまった

「とりあえず寝れる場所探しましよう。…：あの教会とかどうですか？」

「寝れりやあどこでもいい」

「じゃあ今日はあの教会で寝ましよう」

「おう！」

そう言つて2人は教会の中に入つていった

「…：ボロいな」

「そうですね」

すると協会の奥の方から

「ん〜？誰かいるのかい？」

なんて声が聞こえてきた

「え？」

「あ？」

「君たちこんな時間にここに来てどうしたんだい？」

「え、えつとですね…」

「俺らを入れてくれるファミリア探してたけどよ見つかんなくて日暮れちまって寝泊まりする場所探してただけだ」

「そうなのかい!?!なら良かったらだけど…僕の眷属にならないかい!?!」

「へ？」

「あ？」

ひよんなことからファミリアを見つけた2人

このとき2人はオラリオ中に名前を知られることになるとはまだ知らなかった

第2話

「オラア！」

空気を切り裂く音とともに鮮血が空を舞う

「ウラア！」

彼の前から一体また一体とモンスターが消えていく

「ウオラアアアー!!」

そして10体ほどいたはずのモンスターはことごとく彼に狩られたところで

「あ”ー”ークソよえええー!!」

叫んだ

それを見ていた白髪の少年は

「……すごい」

ただ呆然としてた

？

時間は少し遡り

ヘスティアと出会い教会の地下に案内された2人はそこでひと夜を過ごした次の日の朝

ヘスティアが話を始めた

「君たち昨日はよく眠れたかい」

「はいよく眠れました」

「まあな寝心地は悪くなかったな」

「うんそれは何よりだ。それじゃあ今から君たちに【神の恩恵^{ファールナ}】を与えようと思うけど準備はいいかい？」

「準備ってなにをすりゃいいんだよ？」

「服をまくって背中を出してくれるだけでいいよ」

「そか。んじゃ先にベル、お前がやっつけ」

「え？僕からですか？いいんですか？」

「順番なんざ重要じゃねえだろうが。それにこれからこの【大将】はお前だろ？なら上の立場のもんからこういうことすんのは当たり前だろうが」

「はあ………ん？大将？………大将!?僕がですか!？」

「そう言っただろうが」

「ならボクは何になるんだい？」

「あ？ヘステイアは【殿様】だろ？」

「殿様か…男じやないけどな………でも悪くないね」

「ちよ、ちよと待っててくださいよ！大将ってことは団長ってことですよね!?僕には無理ですよ！ムサシさんのほうが……」

「あー悪いが俺は無理だ。人の下につくのは別に大したことねえが人の上に立つのは柄じゃねえんだよ。つかお前英雄になるんじゃないのかよ?…こんな嫌がっててなれんのか?」

「う……それは……」

「経験って思っすりやいいんじゃないの?」

「……わ、分かりました」

「うし!そんじゃあ殿様頼んだぜ」

「うん!任せて!それじゃあベル君背中を出して」

「は、はい!」

なんてことが朝からあり

ベルとムサシはファルナを刻んでもらっていた

『ベル・クラネル』

L V . 1

力 : I 0

耐久 : I 0

器用 : I 0

敏捷 : I 0

魔力 : I 0

《魔法》

□

《スキル》

□

『森 武蔵』

Lv. 1

力	:	I	0
耐久	:	I	0
器用	:	I	0
敏捷	:	I	0
魔力	:	I	0

《魔法》

□

《スキル》

□

これが現段階の2人のステータスである

これを見たムサシは

「ただの雑魚じゃねえか」

「まあ冒険者になった証拠ってだけだからね。1度でも戦えば現段階の君のステータスは表示されるはずだよ。レベルは総じて1のままだけだ」

なんてへステイアから言われた

その言葉を武蔵はステータスが書かれた羊皮紙を見ながら

「へー便利なもんだな。うし！大将早速行くぞ！」

「え！今からですか!？」

「おうよ！」

「自分まだ武器とかないんですけど…」

「そうか！んじや装備買っていくぞ！」

「……お金もないんですけど」

「まあ落ち着いてムサシくん。先にギルドに冒険者登録をしなきゃ」

「お！そうか！んじやギルド行って装備買ってダンジョン行くぞ！」

なんて言いながらベルの手を引くムサシ

「え！ちよ、ちよつと落ち着いてくださいよ」

「あ！ちよつとムサシくん！」

今のムサシには2人の声は聞こえなかった

？

「おい大将そっち行つたぞ」

「え？う、うわ！」

あの後ギルドに行き冒険者の登録をすませダンジョンに来た2人

ムサシは1本の槍と腰に携えた日本の刀という武器はあるが防具という防具を着てない

ベルはギルドから支給されたナイフを1本だけ持っているだけというダンジョンを舐め腐つてるような格好で来た2人

だがしかし今のところ怪我というケガをしてないのはひとえにムサシの強さにあつた

「たくよオ…びびつて目つぶつてちや襲われるだけの的になるぜ」

そんなことをボヤきながらベルに向かつていたモンスター首を後ろから槍で切るムサシ

「あ、ありがとう」

「おう。にしても大将つてよ戦闘はズブの素人か？」

「ま、まあそうなるかな？」

「俺はナイフの使い方なんざ知らんから大将の戦闘スタイルに口は出せねえがこれだけは言うぞ。『自分が最強だ』つて思えや。んでもつて『臆病』になれ」

「え、えつと…どういう…」

「イメージするのは誰にも負けねえ自分で想定するのは常に最悪の状況だ。矛盾してるかもしれないねえが戦場なんてそんなもんだ。固く考えんなよ。こうなつちまつたら怖えな。でも俺つええし大丈夫だろ。みたいな感じでいいんだよ」

「それができないんですよ……」

「ウヒヤハハハ！だろうな！こいつはもう場数踏んで慣れるしかねえよ！」

「そうですよね…」

「つーわけで今日は戦闘に慣れていこぜ？」

「は、はい！」

「ウヒヤハハハ！固くなりすぎだろおが！リラックスしてけ！？」

そして冒頭へ

「たぐよおくそ弱えじゃねえか。にしてもここら辺はあらかたやれたか？なあ大将？」

「え？あ！うん！そうだね」

「んじやもう少し下に行ってみつか」

「そうですね行きましょうか」

「んで大将どうよ？戦闘には慣れたか？」

「まあ少しづつといった感じですけどね」

「それでいい。焦らずじつくりだ。国治めるのと一緒だぜ？」

「国治めたことないんですけど…。それよりムサシさんって王様かなにかだったんですか？」

「いんや別に…。ただそういう奴の下についてたってだけだ」

「へー凄いですね！」

「……………凄かねえよ。なんも」

その時初めてムサシの顔に陰が見えた

それに疑問を持ったベルは質問しようとした

「……………ムサシさんはなんで…」

「んな事より腹減った！飯食うぞ！」

だが無理やり話を変えられかわされてしまった

「じゃが丸だっけか？あれ買ってただろ。そろそろ食おうや」

「……………分かりましたよ」

ベルは質問を諦め苦笑いをしながらそれを了承した

「それよりここで食べるんですか？」

「なんだよダメか？」

「ここモンスターが生息してる場所ですよ？襲われたりしたら…」

「だーいじょうぶだって！そんなときや俺がどうにかしてやつから！」

なんて言いつつその場に座り込む

「おっしや！食うぞ！」

?

「美味かったなあ!」

「そうですね」

あの後昼ごはんを食べた2人は下の階層に向かっていた

「さてとここが…」

「5階層…ですね」

2人は新たな階層5階層に来ていた

「受付嬢には3階層まででやめとけって言われてたっけか?」

「そうですね。でも僕も戦闘に慣れてきましたし大丈夫ですよ」

「ウヒヤハハハ!その意気だけ大将!…でもよ警戒はしてけよ?」

それは冗談で言っているような雰囲気ではなかった

「…は、はい」

それを聞いた武蔵は満足したような顔をして

「…おっしや!んじやこれからどうするよ?分かれてやってみるか?」

「そうしますか?」

「変なことにならないきや大丈夫だろうからなあ。まあいいか。んじやまあ分かれてやるぞ。やばそうだったら叫べ」

「分かりました」

「んじや俺こっち行くわ」

「じゃあ僕はこっちですね」

なんて言いながら2人は分かれて行動し始めた

?

「ああクソつまんねえなあ。この階層もクソ雑魚しかいねえじゃねえか」

あの後ベルと別れたムサシはモンスターを30ほど狩っていた
たったの10分で

「たく…もつと下行きやいいのか?」

この男の強さの秘密は普通の冒険者とは違う決定的な部分がある
からだ

それは…

「にしてもやっぱ血い流したり返り血浴びたりしてる時が生きてるって感じがするなあ」

自分のことを考えずに敵を殺すことだけを考えていることだ

「て言っても痛てえもんは痛てえなあ。……ポーション持ってきてたか？」

（ん？……なんかおもしれえヤツいるなあ。つかこれ大将と鉢合わせたら不味くねえか？大将探すか）

と何かしらのモンスターの気配を感じとったムサシ

とその時…

『ギャー！』

「あ？……今の声」

『ムサシサーン!!』

ベルであった

「やっべえ！」

慌てたムサシは声のしてきた方へ急いで向かった

？

「あれかあ！」

ベルを見つけたムサシ

しかしベルは人の形の牛に壁際まで追い詰められていた

「チツ！こんのクソ牛があ！ウチの大将にちよっかい出してんじやねえよお！」

とムサシは手に持っていた槍を全力で投げた

ムサシの手から放たれた槍は牛のモンスターの背中にぎっくりと刺さった

そしてムサシはその槍に向かって跳躍し槍の柄を掴んだ

「オラア！クソ牛が！調子に乗ってんじやねえぞ！」

そしてそのまま自分と同じような体型の牛のモンスターをさしたまま持ち上げ

「おらくたばれ！『人間無骨』!!」

と槍の先端が開き十文字槍の形になる

もちろんモンスターは刺さったままなので槍が開いた拍子に血が

吹き出した

少しの間もがいていたモンスターだが数秒後に動かなくなった
槍からモンスターを引き抜いたムサシはすぐさまベルに話しかけた

「よう。大丈夫か？大将？」

「え？あ、うん。ありがとうございます。ムサシさん」

「いいってことよ！無事で何よりだ！んな事より……ウヒヤハハハ！
血だらけじゃねえか！」

「え？」

ベルの体はムサシがモンスターを殺した拍子に吹き出した血がも
ろに被ってしまつて全身真っ赤になってしまつていた

「うわあ……」

「ウヒヤハハハ！さつさと地上に言つて洗つてきた方がいいんじゃない
ねえの！」

「……笑いすぎですよ。でもまあそうさせてもらいます。ムサシさん
は？」

「俺はもう少し残るわ」

「そうですか。それじゃまた」

「おう！」

と言つてベルは走つていつてしまった

「………んで？その岩陰から覗いてるヤツらなんか用かよ？」

そう声をかけた途端岩陰から2人出てきた

「あちやーバレちゃつてたかー」

「………」

「なんか用かよ？」

この時が初めて【ロキファミリア】の【剣姫】と【大切断^{アマツン}】との邂逅
だった

第3話

「んでなんか用か？」

ムサシは自分の前に立っている2人に問いかける

「用っていうかなんて言うか…」

褐色の方が答えそして金髪の方が口を開く

「あなたのレベルは幾つなの？」

「ちよ、ちよつとアイズ人のステイタスのことはさ…」

「1」

「え？うそ？」

「そんなわけが無い。レベル1の冒険者がミノタウロスをあんな簡単に倒すなんてありえない」

「んな常識知らねえよ。現に殺してんだろうが」

「……………」

「え、えくと…」

「用がねえならもう行くぞ」

とムサシは地上に引き返そうとした

だが…

「待って」

「あ？」

「どうして……………どうしてそんなに強いのか？」

「はあ？」

「それは私も気になるかなあ……………つて私も思うなあ」

それを聞いてムサシは

「ブツ！」

「？」

「ウヒヤハハハ！俺が強い？バカ言ってるじゃねえよ！」

「でもあなたはレベル1でミノタウロスを倒してみせた」

「ああそうだな。さっきの牛野郎は俺がきっちり殺した。だからなんだ？どんなやつでも死ぬ時は死ぬだろうが。お前らだってそうだし俺だってそうだ。だから死なねえように死ぬ気で殺すんだろうが。」

強くなったんじゃねえ。俺が俺として死なねえ方法を身につけてきただけだ」

「すごい考え方」

「……………変わってる」

「んなこたア俺が1番知ってるわ。考え方なんざ人それぞれ千差万別ってやつだ」

「……………そうかもしれない」

「でも君の生き方危ないよ?」

「知ってるわ!でもそつちの方が生きてるって感じがすんだらうが!」

「ふくんそつか」

「あ。あともう一つ言いたいこと……………謝りたいことがあるの」

「あ?なんだよ」

「さっきのミノタウロスのこと!私たちの不手際でこの階層まで来ちゃってさ」

「そう。そのせいで一緒にいた子を危険な目に合わせたから」

それを聞いてムサシは何かキレそうになった

「テメエらのせいだったのか…」

「っ!」

殺気を感じた2人は臨戦態勢をとった

ムサシも槍を持つ手に力を込める

「……………でもまあ大将も無事だったし今回は別にいいか」

が残った理性でなんとか踏みとどまった

それを聞いた2人は緊張が解け構えるのをやめた

「とりあえず俺はもう行くわ。じゃあな」

そう言っつてムサシはこの場をあとにした

?

「んで大将はどこにいった?」

地上に戻ってきたムサシはベルと合流しようとしていた

「……………ギルドかあ?」

モンスターからとれた魔石を換金してると考えたムサシはベルが

ギルドにいると予想した

「にしてもここは賑やかだなあ。うるせえくらいだ」

屋台などが並び人がごった返してるためなかなか前に進めない

そんな中ムサシはあるものを見つけた

「なんだよ装備屋まであんのか」

そういえばとベルは武器はあるけど防具がないなど考えた

それは自分も同じだが

「つつても俺はいいが大将はあのままだと危ねえしな…。ちと見てみるか」

そう言つて装備屋の中に入つていった

しかしながら装備も意外と量があるわけで

さらにこの男こういうことは慣れてないもんで何を見ればいいのかよくわかつてない

「とりあえず軽くて頑丈なやつでも探してみつか」

？

「なんだよあれ高すぎだろ…」

あの後防具をひと通り見たが軒並み値段が高く諦めた

だがこの男なら無理してダンジョンに潜つてれば買えないこともなさそうな値段だった

「あ。そういや俺も石つころ金に変えてこなきやなんねえじゃねえか」

さっさと行くかと歩き出した

「あーその前にじゃが丸買つてくか」

何気じゃが丸君にハマったムサシであつた

？

「ようメガネ。お！大将もやつぱ居たか！」

ギルドまで歩いてきてドアを開け周りを見渡してみたらそこには受付嬢の「エイナ・チュール」とその彼女と話してるベルがいた

話してるよりも説教と言つた方が正しいが…

「あ。ムサシさん」

「ムサシくん！」

「あ？」

「君たち5階層まで行ったってほんとなの!？」

「だったらなんだよ？」

「なんだよじゃないでしょ!?危険だから3階層までにしといてねって言ったじゃない!？」

「そんなん知らねえ。忘れた」

「忘れたあ〜?あのねこっちはね君たちのこと考えて言ってるのよ?もしもの事があつたら…」

「そんなときや俺がどうにかしてやるわ」

「どうにかって…」

「まあまあ落ち着いてくださいよエイナさん」

「ベルくん!君だつて人のこと言えないんだからね!？」

「は、はい」

「なんもなかったからいいだろうが」

「あのね〜!」

「んな事より換金だ。さつさと金に変えてきてくれねえか？」

と言つて手に持ってたパンパンの皮袋を渡す

「え?何これ重い」

「いくらになるんだろうな!大将!」

「え?そうですね。僕のでしたらアレで3000程だったのでムサシさんののは15000くらいにはなると思いますよ」

「んな安いのかよ。やっぱ雑魚は儲かんねえな」

「いやいやムサシくん君ほんとにレベル1なの?これはレベル2とかの人の儲けよ?」

「あつそさつさとやって来いよ」

「……態度悪くない?」

「いつもこんな感じですよ」

「ベルくん。慣れすぎじゃない?」

今日もこの男の周りは賑やかだった

?

「んで大将。これからどうするよ？」

あの後ギルドで魔石を換金してもらった2人はエイナからの説教を躲し街を歩いていた

「そうですね。今日はもう特にやることも無いですし本拠ホームに帰ってもいいと思いますけど」

「そうだなそろそろ日も暮れるしなあ」

そう言っつて2人は本拠に帰っていった

(にしてもこの気色悪い視線どうにかなんねえのか)

とバベルの最上階に意識を向けながら

？

「やおお帰り2人とも」

「あ。神様ただいまです」

「おう」

あの後本拠まで歩いて帰ってきた2人

出迎えてくれたのはヘステイアだった

「うんうんいきなりとび出て行った時はびつくりしたけど無事ですよ
かったよ」

「はい。ムサシさんが強くて大丈夫でした」

「やっぱりムサシくんのその巨体は見てくれだけじゃなかったんだ
ね」

「あつたりまえだろうが！大将守んのは俺の役目だ！」

と笑いながら叫ぶ

「ムサシくん声がでかいよ」

と呆れ顔でヘステイア

「お悪いな」

「それでいくら稼げたんだい？」

「僕は3000程で」

「俺が23000だな」

「……………へ？」

「ムサシさん凄いですよ！ミノタウロスをあつさり倒して！」

「ちよ、ちよつと待ってくれベルくん！ムサシくんミノタウロスを倒

したの!？」

「あ？あああの牛野郎のことか？それなら俺がきっちり殺したぞ？」

「いやいやレベル2の冒険者が倒すようなモンスターだよ!?!稼いできたお金のこともこれもレベル2の冒険者の儲けだよ!？」

「だからよオんな常識知ったこつちやねえよ」

「常識も何も…」

「んな事よりもステイタスの更新でもしようや。なあ大将？」

「そうですね。僕もステイタス気になりますし」

「……………ベルくん…順応しすぎじゃないかい？」

どこに行っても驚かれる男だった

その後2人ともステイタスを更新してもらいじやが丸君を食べ寝床についた

？

僕の名前はヘステイア

最近僕の元にやってきた子どもたちがいる

1人は白髪に赤い目でとても保護欲をかき立てられるような兎のような少年

【ベル・クラネル】

そしてもう1人は赤い髪を束ねギザ歯でとても大きな体のパツと見このオラリオ最強の冒険者のオツタルといい勝負をしそうな屈強な男

【森武蔵】

まさに正反対と言ってもいいような体格と性格の2人が僕の眷属になってくれた

そして【神の恩恵】を授けた当日ダンジョンに潜って行った

とても心配はしたが2人とも無事に帰ってきてくれた時はほっとした

だけでもムサシくんは本当にレベル1なのかと疑いたくなったよ

レベル1でレベル2相当のモンスターを倒しお金を稼いできた

嬉しい反面とても危なっかしいと思つた

そしてその夜2人のステイタスを更新した

したんだけど……

「……ベルくんもムサシくんもまあ特にムサシくんだけけどさあ。これはやっぱりほかの神どもから注目浴びちやうだろうなあ」

なんて2人が寝てる横で2人のステイタスを写した羊皮紙を見ながら嘆く

『ベル・クラネル』

L V. 1

力	:	I	0	↓	I	8	2	
耐久	:	I	0	↓	I	1	3	
器用	:	I	0	↓	I	9	6	
敏捷	:	I	0	↓	H	1	7	2
魔力	:	I	0	↓	I	0		

《魔法》

二

《スキル》

リアリス・フレイゼ
【憧憬一途】

- ・ 早熟する
- ・ 憧憬が続く限り効果持続
- ・ 憧憬の丈により効果向上

「多分……というか絶対レアスキルだよねこれ。この憧憬は恐らくムサシくんなんだろうな。いいコンビになりそうだ。ほかの神どもに目をつけられたら大変そうだからベルくん自身には教えてないけどムサシくんは気づいてたっぽいよね。まあ察してくれたみたいだから大丈夫かな。それで……問題はこっちなんだよね」

と言ってムサシのステイタスを見る

『森 武蔵』

L V . 1

力	:	I	0	↓	B	7	5	6
耐久	:	I	0	↓	A	8	5	2
器用	:	I	0	↓	H	1	3	7
敏捷	:	I	0	↓	C	6	8	3
魔力	:	I	0	↓	H	1	5	0

《魔法》

オーガシエル
【鬼の守護】

・常時魔法

- ・ 護る対象が近くにいるとき発動
- ・ 対象のダメージを一部肩代わりする
- ・ 対象に対する思いの丈により効果向上

【詠唱】



《スキル》

にんげんむこつ
【人間無骨】

- ・ 武器を装備してる間全ステータス高補正
- ・ 攻撃した際の傷が通常より深手の傷となる
- ・ 敵ステータスに関係なく攻撃が通るようになる
- ・ 手にした武器に不壊属性デユランダを付与する

ダメージドローブ
【自傷蛮勇】

- ・ ダメージを受けてるほど全ステータスに補正がかかる

スピリット
【精神汚染】

- ・ 敵とみなした相手の全ステータスを下げる
- ・ 魔法による状態異常が効かない

ガードン・フレッセ
【守護一途】

- ・ 早熟する
- ・ 護るべき対象がいる限り効果持続
- ・ 護る対象に対する思いの丈により効果向上

「これはほんとにレベル1なのかい？普通ならレベル1がミノタウロスを倒したらレベルアップするはずなんだろうけどムサシくんにとってはこんなこと偉業になってないんだろうなあ。それにしてもこのステイタスは恐らく冒険者になる前に積んだ経験値が出てきたんだろうけどこのスキルと魔法は……」

「これからのことを考え頭を抱えるへステイア

「とりあえずステイタスのことは2人に説明したけどこのスキルと魔法は秘密にしといて正解だったのかな。それにしてもレアスキルが2人合わせて5つなんて……はあ……」

「明日からでもミアハのところに胃薬買いに行こうと考える彼女であつた

第4話

「おっしやア！大将今日もダンジョン行くよな！」

「行きますよ。行きますからもう少し落ち着いてください…」

次の日の朝

ムサシの声がホームに響いた

「おお悪いな大将」

なんてベルに謝ると

「ボクにも謝って欲しいな」

なんてヘステイアが言う

「お！殿様も起きてたか！悪いな」

「君の声で目が覚めたんだよまったく…」

大きくあくびをしながら言った

「そうだったのか…そいつはほんとに悪いことしたな。詫びに茶でもいれるか？」

「へ？お茶をいれるのかい？」

意外そうにヘステイアが言う

「おうーやっぱ茶はいいもんだろ？」

何気この男茶の湯の腕はプロ並みでそれはそれは美味しいものを入れれることで定評だ

「へーそれは僕も初耳ですな」

「なんなら大将も飲むか？」

「じゃあ一杯だけ」

それを聞いたムサシは自分のものを入れてる棚から茶葉とお茶を入れる為の道具を一式出した

「……だいぶ本格的なんだね」

「安物だけどな」

「それでも凄いですよ」

なんてことを話しながらお茶をいれ2人に出した

「いい香りだね」

「そうですね」

「冷めねえうちに飲めや」

と言われ2人は口にする

だが

「……苦い」

「ううそうですね」

顔を顰めながらそんなことを言う

「ウヒヤハハハ！慣れねえうちはそんなもんだぜ！」

「でもなんだか落ち着きますね」

「うんボクもそう思うよ」

と言われ気分がいいムサシ

「だろ？」

と笑いかけながら言った

その後2人はしつかりとお茶を飲み干した

そして

数分後

「つーわけで大将。そろそろ行こうぜ」

「あ。はいそれじゃ神様行ってきます」

「言ってくんぜ殿様」

「うん気をつけてね」

そう言つて2人は本拠をあとにした

？

「んで大将今日はどこまで行くよ」

なんて歩きながらベルに問かける

「3階層までにしときましようか。エイナさんからまた説教されたくないですし」

「ウヒヤハハハ！確かになあ！」

なんて話していると

「あのすみません」

と後ろから声をかけられた

「えっ？」

「あっ？」

振り返ったならそこにはメイド服を着た銀髪をポニーテールにまとめた少女がいた

「おう。なんか用か？」

「これ落とされましたよ」

と言つて魔石を渡してきた

「あ？全部金にしてた気いすんだけどなあ。大将のか？」

とベルに聞くが

「僕も全部換金したはずですけど」

と言われる

とりあえずここで押し問答しててもしょうがないので

「まあいいか。悪いな」

と言つて魔石を受け取る

「はい。………とところで冒険者さんですよね？」

「あ？ああまあな」

「やっぱりですか！こんな朝早くからダンジョンに行かれるんですか？」

「まあ俺がさつきと行きてえって大将に言ってるだけだけどよ！」

「いつもこんな感じですよ」

「凄いですね。あ！ちよつと待っててください」

と言つて背にした酒場の中に入った

そして数秒後バスケットをもって酒場から出てきた

「良かったらこれを持ってってくださいー！」

と言つて手にしてたバスケットを差し出してきた

「あ？なんだこれ」

「お弁当です。ダンジョン内のお昼としては是非食べてください」

「あーどうするよ大将？」

「え!?僕ですか!?そ、そうですね。…えつとなんで僕達に?というか僕達に渡してお昼大丈夫なんですか?」

「お店から賄いも出ますし大丈夫ですよ。渡す理由としてはそうですね…客寄せですかね」

とはにかんで言う

「これを差し上げるのでお礼に今夜私たちのお店に来てください」

「え、でも…」

「頼みましたよ！あ。あと私の名前はシルです！よろしくお願いしますね！」

と笑って言って店の中に入っていった

「ウヒヤハハハ！大将いっぱい食わされたな！」

「……はあ」

そして今日も2人はダンジョンに潜る

？

ダンジョンの3階層

今2人がいる場所だ

「どうだ大将、調子は？」

「いいですよ。でも」

言葉に詰まるベル

「あ？どした？」

「……こんなことでいつムサシさんに追いつけるんだろうって…」

そんなことを言う

それに対してムサシは

「なんだ不安か？」

「そりゃあ…そうですね…」

とか細かい声でつぶやく

「ブツ！……ウヒヤハハハ！」

「な！笑わないでくださいよ…」

「んな昨日今日で始めた戦闘でおいそれと俺を超えられたら俺の面目丸つぶれだろうが！」

と笑いながら言う

「でも焦るのはいいな。強くなるためのコツつっーのはな焦ることだ。危機感持ったりや無我夢中になれっからなあ。コツコツだ。地道が近道。まあ頑張れ！」

「……分かりました」

と悩みが吹っ切れた顔をしながら言った

その時

「あ？なんだ？」

ダンジョン内が不自然に動き出した

「あームサシさん！あれ見てくださいー！」

ベルが指をさしながら言う

「なんだよ」

と言って振り向いたら

そこには今まさにダンジョンからモンスターが生まれるところだった

ざっと40程の数が

「大将どうするよ？」

「普通なら引きたいですけど…」

その時ベルの頭にはムサシが多くのもンスターをなぎ倒すシーンが浮かび上がった

「やってやりますよ！」

「おっしゃア！その意気だけ大将お！」

2人はモンスターの群れに突っ込んで行った

？

「普通に疲れましたね」

あの後全てのモンスターを倒した2人

「魔石を回収し安全地帯セーフゾーンで休んでいた

「そうかあ？俺はまだまだ行けるぜ？」

「流石ですね」

と疲れた顔でしかし目を輝かせながら言った

「んな事より飯食うぞ。あのメイドから貰った弁当食おうや」

「そうですねお腹も減りましたし」

「と言って弁当を広げ2人は食べ始めた

？

「ういー今日も狩った狩った！」

お昼を食べたあと2人はまたモンスターを狩っていた

そして3時間程たちダンジョンから出てきていた

「んでこの後は？」

「ギルドに行つて魔石を換金してもらつてその後本拠に戻りましよう」

「おう！分かったぜ」

そう言つて歩き出す

がその時武蔵野目にあるものが映つた

「あ。大将」

「ん？どうしました？」

「……じゃが丸買つてかねえか？」

「……ムサシさん……じゃが丸君にハマりましたね……」

その後ムサシは小豆クリーム味のじゃが丸君を5個ほど買いギルドまで歩きながら美味しそうに食べていた

？

「今帰りましたよー！神様ー！」

あの後ギルドに行つて換金をしてきた2人は本拠に帰つてきた

「おー！おかえり2人とも！無事それでよかつたよ」

「当たり前だろうが！俺がいんだから心配なんざ余計つてもんだ」

「ハハハ……。今日もムサシさんに助けられてばっかでした……。モンスターーの群れに遭遇して……」

とベルは言うが

「そうだなあ確かにほぼ俺が狩つた。でもやるつて決めたのは大将自身じゃねえか！それだけでも一歩前進だろうが！」

「そうですかね？」

「おお！そうだ！だからもつと胸張れや！」

と背中を叩いた

「は、はい！」

それを見ていたヘステイアは

（やつぱり君たちはいいコンビだよ。うんボクも一肌脱ごうかな）
なんてことを思いながらある招待状を見ていた

「え？神様今日バイトの打ち上げなんですか？」

「うん帰ってくるのは夜遅くなるかもしれないね」

「まあいいんじゃない？ゆっくりしてこいよ」

「そうだね今回はその言葉に甘えさせてもらおうよ」

「おう！行ってこい！」

「行ってらっしゃい神様」

「うん行ってきます！2人とも！」

と言って本拠を出ていった

「んで大将？今何時だ？」

「えくと6時少し前くらいですわね」

「んじや俺らそろそろも行くか」

と言って椅子から立ち上がった

「え？行くつてどこに…」

「なんだよ忘れてんのか？」

と笑いながらテーブルの上に置いていたバスケットを手に取る

「飯食いに行くぞ」

？

「ここだな」

「ここですね」

あの後シルと出会った場所まで来た2人

そこには【豊穰の女主人】という酒場があった

「うっしや。入っか」

「あ。はい」

そう言つて扉を開けた

そして

「いらつしやいませにやー！」

と猫耳のあるメイド服を着た少女が近づいてきた

「何名様にや？」

「2人だ」

「了解にや！お客様2名入りますにや〜！」

と店内に響く声で言った

「それじゃカウンターのの方に案内するにや」

と言われ案内された席に座る2人

そしてベルが店内を見渡して

「繁盛してますね」

「そうだなあ。案外人気のある店だったのかもしんねえな」

と話していると

「あー今朝の冒険者さん方！」

と声が聞こえた

声のした方を見るとそこには

「来てくれたんですね！」

シルがいた

「シルさんこんばんは」

「おう来たぞ銀髪」

「銀髪じゃなくてシルです！」

と言いながら近づいてきた

「まったくもう…それで何を食べられますか？」

「あー大将どうする？」

「そうですね…おすすめのものをいくつか」

「はい！分かりました！」

と言って厨房の方に入っていった

そして数分後

「はいお待ちー！」

「うわー！」

「お？来たか」

大きな体をしてるおばさんが厨房から大量の料理を持ってきた

「あんたらがシルの言ってた冒険者だね？大食いつて聞いてたが…なるほどねえ、あんたの事だね？」

とムサシを見ながら言う

「まあ大食いつて訳でもねえけど、よく食う方だな」

「そうかい！まあ楽しんでいきな！」

と言って厨房の方へ戻って行った

「よし大将食うぞ！」

「あ、はい」

そして2人はテーブルの上に並べられた大量の料理を食べ始めた
「あ、大将これうめえぞ」

「これも美味しいですよムサシさん」

なんて話しながら食べる2人であった

そして少し時間が経った時

「お2人とも楽しんでらっしゃいますか？」

声のした方を向けばそこにはシルがいた

「おう。あーっとシ、シ、シ…」

「シルさんですよ、ムサシさん」

「あー、そうそう！」

「少しずつで大丈夫ですよ。それでどうですかここ」

「圧倒されてます…」

「中々楽しい場所だなあ！」

「うふふ。ありがとうございます」

「：お店の方は大丈夫なんですか？」

「はいミアお母さんから行ってこいと言われてきたので」

「そうなんですか」

「なあシル。茶とかって置いてあつか？」

「あ、はい！ありますよ。今お持ちしますね」

「頼むわ」

と言ってシルは厨房の方に戻って行った

そして数分後片手にコップを持って帰ってきた

「どうぞ」

と言って手に持っていたコップを差し出してきた

「おうあんがとよ」

と言った時だった

「ご予約のお客様ご来店にゃ！」

と言う声が響いた

声が聞こえた方…この店の出入口に目を向けた2人

そこには何人もの男女がいた

「ありや何だ？」

とムサシがシルに聞く

「あれはロキファミアミアですよ」

それを聞いたムサシはオラリオに來た時のことを思い出した

「ああ…あん時のか」

「よくここに來られるんですよ。常連さんですね」

「へー、そうなんですね」

と何の気なしにロキファミアミアを見てたムサシ

その中に見知った顔を見つけた

(あいつらもロキファミアミアか)

ミノタウロスにベルが襲われた時に出会った【劍姫】と【大切断】だ

「まあ俺らは俺らで食べばいいだろ」

「そうですね」

素晴らしい2人は談笑しながら食事を続けた

第5話

「大将これも食つとけ」

「いやいやこんなに食べられませんって！」

あれから2人は大量の料理を食べ進めていた

「ちゃんと肉つけてかなきやなんねえだろうが。そういやシル、これ返すな」

と言つてシルにバスケットを渡す

「ありがとうございます。それで味の方は…」

「おう！美味かったぜ」

と笑つて言った

そしたらシルは顔を輝かせて

「ありがとうございます！」

その間ベルは

「もう食べられません…」

料理に悪戦苦闘していた

「ウヒヤハハハ！」

そんな時

「おいアイズ！あの話みんなにしてやれよ！」

と言う声が響いた

声の主はロキファミアリアの一員【凶狼】ヴァナルガンドの【ベート・ローガ】だった

「あの話？」

とアイズが聞くと

「あれだってー！ 帰る途中で何匹か逃したミノタウロス、奇跡みてえに5階層まで逃げてったやついたろ？」

そのときによオ、アホみたいに叫んで逃げてるいかにも駆け出しつて感じのひよろくせえガキを見たんだよ！」

「ミノタウロスって17階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、すぐ集団で逃げ出していったやつのこと？」

と聞くティオナ

「それぞれ！　どんどん上層に上がっていきやがってよお。それで5階層に行ってみたらそのガキがめちやくちや怯えながら逃げててよ！」

それを聞いてたムサシがベルの方を向くとベルは手を力強く握り下を向いていた

「それでアイズがミノタウロスを追いかけてったけどよ：あのガキの逃げてる時の顔、思い出しただけで笑えてくるぜ。ほんと自分でなんも出来ねえ雑魚ならダンジョンに潜んなくなって話だよな」

とベートは腹を抱えて笑っている

他にも笑ってるものはいるがそれは苦笑いと言うよりも愛想笑いと言うようなもの

それも数人だ

他のものは無表情を貫いていた

ムサシはベルを見ていた

今にも手から血が出てきそうなほど力強く握りしめ歯を食いしばっていた

「しつかしああいうヤツ見ると胸糞悪くなっちゃうよなあ。ああいうのがいるから俺達の品位が下がるってもんだ。勘弁して欲しいぜ」

とその時

「いい加減そのうるさい口を閉じろベート」

と凜とした声が響いた

その声の主は【九魔姫】^{ナイン・ヘル}の【リヴェリア・リヨス・アールヴ】だった

リヴェリアは話を続ける

「ミノタウロスを逃したのは我々の不手際だ。それを棚に上げてその冒険者を酒の肴にしようなどと恥を知れ」

と一喝

それに対してベートは

「おーおー流石エルフ様。誇り高いこって。どごぞのハーフエルフ野郎とは大違いだな。でもよおゴミをゴミと言って何が悪い」

ムサシはまだ黙ってベルを見ていた

「2人ともそろそろやめえや。せつかくの酒が不味くなるやろ」

と主神ロキが一言

「アイスお前はと思うよ？ 自分より弱え震え上がって逃げ出す雑魚のことをよ？」

しかしベートは止まらない

この質問に対しアイズは

「あの状況なら仕方なかったと思います」

アイズの言ってることはもつともである

レベル1の冒険者がレベル2相当のモンスターに立ち向かうことは自殺行為に等しいものだ

そのためあの状況で逃げ出したのは仕方ないと言える

しかしベートは

「じゃあ質問を変えるぜ。あのガキと俺ツガイにするならどっちがいよいよ？」

「ベート。君酔ってるね？」

見かねたロキファミリアの団長：【勇者】^{フレイバー}の「フィン・デイルナ」が声をかける

だがそれでもベートは止まらない

「聞いてんだよアイス！ お前はどっちを選ぶってんだオイ！」

それに対しアイズは

「……私はそんなことを言うベートさんとだけは……ごめんです」と返される

それを見ていたりヴェリアは

「無様だな」

と一言

それを聞きベートは怒りを露わにする

「黙れババア！分かってんのかアイス。自分より弱くて軟弱な雑魚野郎なんざお前の隣に立つ資格なんざねえんだぜ。」

何よりお前自身が認めねえ！あんな英雄にもなれねえ様なクソガキじゃ釣り合わねえんだ！アイス・ヴァレンシュタインにはなあ!!」
ベルはもう逃げ出したい

そう思った瞬間

ベートの体は店の壁まで吹き飛ばされた

「ガハッ！……くそ痛えな……誰だコラア！」

ベートはさつきまで自分が座ってた場所を見た

そこにいたのは

「よオクソ犬……くたばれ」

ムサシが立っていた

ロキファミアリアは何が起こったのか理解出来ていない

もちろん豊穰の女主人もお客もそしてベルも

とある1人の冒険者を馬鹿にしたベートが接近されたことに気

づかずそのまま吹っ飛ばされたのだ

レベル5の冒険者のベートが

それを驚かないというほうが無理があるというものだ

「……てめえ何もんだ」

「んなこたアどうだっていいんだよ。とりあえず死ねや」

と言ってベートに突っ込んでいくムサシ

「チッ！」

ムサシから突き出された槍を躲しそれに合わせてムサシの顔面に

カウンターの蹴りを放つ

「ベート！誰だかわからないけど君の蹴りを受ける彼もただじゃ済ま

ない！やめるんだ！」

と団長のフィンが止める

ムサシは顔面に蹴りを受けたことにより額から血を流し後ろによ

ろけてしまう

「こいつから吹っかけてきたんだろうが……」

「オイオイ誰がやめるって言ってんだよ」

と声が聞こえた瞬間ベートの顎に槍の刃が迫ってきていた

「なっ！クソっ！」

間一髪で体をのけぞらせて躲したベート

そのまま槍は振り上げられ天井に当たった

「危ね……」

「オラア！」

と仰け反った拍子にガラ空きになった腹部へ蹴りを叩き込む

「カハッ！」

「ヒーハー!!」

と振り上げた槍をそのままベートに振り下ろす

「っ！クソが！」

それを横に移動し躲す

ムサシは自分から見て左に移動したベートに刃を向け

「ウロチヨロしてんじや…ねえ!!」

突き刺す

それを足でガードしたベートはそのまま押し飛ばされる

「ハア…ハア…クソ！なんだってんだ！」

「ベートが…」

「押されとるやと?」

「あの大男誰や」

「知らんな。見たことない」

「にしてもあの【凶狼】が押されてるぞ」

「ムサシさん…」

この攻防を見てたロキファミアリアの面々や客、そしてシルは驚きを隠せない

「てめえ一体なんのまねだ…」

「なんのまね? ギヤハッ！ただてめえが気に食わねえだけだ！」

「はあ?」

「さつきから気分の悪い話しやがってよオ。てめえのミス棚に上げてよくまあ笑ってられんなあくそ犬が」

「だったらなんだってんだよ。雑魚は雑魚、泣きわめくだけの覚悟のねえやつが冒険者の真似事なんかするなってんだ！」

「雑魚は雑魚お? ブツ…ウヒヤハハハ！」

「何笑ってやがんだ！」

「そりゃあ雑魚は雑魚だ。んじやまあ聞くがてめえが冒険者になりたてのレベル1だった時はレベル2相当のバケモン前にして逃げねえ

「でぶち殺してんだな？」

「はあ？お前何言って…」

「泣きわめいて敵前逃亡なんつーことはてめえはしたことがねえんだな？」

「だから何言って…」

「どんだけ強え敵だろうがてめえは逃げることはねえんだな？」

「さつきから何言って…」

「他の野郎のミスでてめえが死にかけたとしてもてめえなら笑って許せんだな？」

「さつきから分けのわかんねえことを！」

とベートが叫ぼうとした瞬間

「もしかしてさつきベートが話してた冒険者の仲間かいな？」

とロキの声が聞こえた

「は？..」

と声を上げるベート

「どうなんだあ？」

とムサシは聞く

「…:んな事あしたことねえよ」

「なんでだよ」

「はあ？無理に決まってるんだからだろうが！」

と叫ぶ

それに対して

「ああ無理だよなあ。んじやてめえは自分で無理なことをその冒険者に求めてたってわけだ」

「っ！..」

「上にいるもんの立場って重いよなあ？下のもんを守ってやんなきゃならねえ。それなのにてめえは自分のミスで下のもんに危ねえことさせたわけだ。しかもそれを棚に上げて酒の肴にするってよオ…」

「……………」

「殺すぞ」

その時ムサシの笑みが完璧に消えた

「っ！」

ベートは警戒態勢をとる

その瞬間ムサシの持つ槍が振り上げられた

「はっ！」

ベートは直撃はしなかったが振り上げられた余波で吹き飛ばされた

バランスを崩したベートはそのまま床に倒れる

「クソっバランスが…ガッ！」

そのまま床に転がったベートの腹を足で押さえつけるムサシ

「キツチリ息の根止めとかねえとなあ」

とベートの首筋に刃を添える

「なっ！クソ！どけ…！」

ともがくが全く逃げられない

そして槍を掲げ上げ

振り下ろそうとした瞬間

「あんた達！」

と厨房から声が響いた

「あ？」

「ここは飯を食う場所だ！店の中もこんだけ壊して…喧嘩したいんなら外に行きな！」

と言われた

店内はムサシの攻撃によってめちやくちやになっていた

「あーこれは悪いことしたな」

「そう思ってるならその足をどけてもらいたい」

「あ？」

と次はロキファミリア団長フィンだった

「誰だおまえ」

「君が今踏みつけてる男の所属するファミリアの団長だよ」

「あつそ。で？」

「見逃してはくれないだろうか？」

「こいつをか？」

「ああそうだ」

「……………」

(チツ。どうすつかな…このまま殺ったんじやこいつらに囲まれそうだしな…)

と考えていたら

「ムサシさん」

「あ？」

ベルから声をかけられた

「おう大将。今こいつの首を…」

「大丈夫ですムサシさん。僕のためにありがとうございます。自分はまだまだ弱いです。それを実感出来ました。ですから僕は強くなります。もう馬鹿にされないように。なのでその人を見逃してくださいお願いします」

「……………」

この時ロキファミアリアの面々も客も店員も全員がこんなことでの男が止まることは無いだろうと思っていた
しかし

「おう大将がそういうんならそうするわ」

と言ってベートから足をどけた

「……………」

店内の人達は困惑している

「そんじや大将今からダンジョンいくか？」

「え？は、はい！…………でもこの状況は…」

「あ！シルここに金置いとくな」

「は、はい…」

「あとそこの赤毛の糸目の女神」

「え？ウチか？」

「自分とこのガキくらいしっかり躰とけ」

「お、おう…」

「んじや大将いこうぜ」

「は、はい！」

そう言つて豊穰の女主人から出て行つた2人だった？

「ムサシくんもベルくんもどこに行つたんだい！まったく一晩待つてたのに帰つてこないし…」

ヘスティアファミリアの拠点となっている教会の前

そこに1人の女神が立っていた

「まさかダンジョンに？いやいや一晩中潜るなんて流石のあの子たちでもないだろうし…」

そんなことを呟っていた

……先に言つておこう

“そんなことはある”

「あ！神様ー！」

「お？殿様じゃねえか！外出て何してんだよ！」

と遠くの方から声が聞こえてきた

「君たちやつと帰つてき…た…」

声のした方を向いたヘスティアは絶句した

そこには身体中血だらけにした眷属2人がいたから

「君たち！大丈夫なのかい!？」

と駆け寄つていくヘスティア

「はい大丈夫ですよ。僕は少し傷を負いましたがそれ以外は返り血です。ムサシさんに至つては全部返り血なので」

「おう！心配すんな」

と笑う2人

「心配するよ！一晩帰らなかつたと思つたら帰つてきて全身血だらけなんだもん！どうしてこんなこと？」

「……神様。僕は弱いです。だから強くなりたい」

「ベルくん……。うんボクも全力で応援するよ！だからこんな無茶はもうやめてね」

「神様……。はい！」

「別に無茶じゃねえだろ」
空気を讀まないムサシであった

第6話

「賑わってんなア」

人混みの中

そこには見た目が正反対の男が二人いた

「そうですね。お祭りですからねー、しょうがないですよ」

ベルとムサシである

モンスターファイア

2人は今怪物祭というオラリオで有名な祭りに来ていた

「んで？この中からあの銀髪を探すってかア？」

とベルが持つあるものに目を向けながらそう聞く

「そうですね。見つかるかといんですけど…」

「ま、歩いてりやみつかんだろ」

「…そうですね。気軽に行きましょうか」

「おう」

そう言つて2人は人混みの中へと入つていった

？

「そう言えば、ムサシさんの持つ槍って重いんですか？」

「んぐ？（？）」

べるはムサシの肩に撞がれた槍を見ながら「そんなことを聞く

「いつもブンブン振り回してるので気になつただけですけど」

「はんははらもつへみふは？」

なんてことを言いながらベルに槍を差し出す

「いいんですか？」

「おふ！もつへみほは！」

「うわっ！重いですね…」

「ブハハハハ！ほめーほふはいんはほ！」

「…：僕には扱えそうにないですね」

「はいほうにははいほうほははいはたつへのはあふ。むひひやひを

ふはほうほすんはよ？」

「そうですね。自分の戦い方ちゃんと磨きます！」

「おう！ほほほーしはぜ！」

「？」

ここで2人の周りにいる人たちの心の声を代弁しよう
〈〈〈〈なんでもわかるの!?!〉〉〉〉

ムサシの口の中には食べ物が詰めに詰め込まれていて
普通言葉なんてききとれないのにベルには通じていた

「……ごくん!ぷはーっ!んじゃ次どこに行くよ?」

「うーんじゃああつちの方行ってみますか」

「おう!」

?

「見つかんねエなア」

「そうですね…」

あれから30分ほど

とある人を探していた2人だったが見つからず…

「あの銀髪どこにいんだよ…」

「ほんとにどこにいるんでしょう。早くこれを届けなきゃ困るでしょ
うし」

とベルは自分の手に持っているシルの財布を見ながら言う

なぜふたりがこうなったのかと言うと、それは数時間前――

『ムサシさん今日お祭りみたいですから行きませんか?』

と拠点のソファに全体重を預けダラっとしてるムサシにベルは聞
いた

『あ?あー祭りかア。いいなア。行くか!殿様も昨日の夜から出かけ
てかえってこないから暇してたしな』

『それじゃ準備してきますね』

そうして2人は拠点を出て街を歩いてた時の事だった

豊穰の女主人……ムサシが暴れた飯屋の前を通った時

『あ!そこの銀髪!大男!待つにゃ!』

『あ?』

『へ?僕?』

と声をかけられた方をむくとそこには、豊穰の女主人の定員の1人
がいた

『はい。これにや』

『へ?』

近づいてきた定員はベルにとあるものを渡してきた

『頼んだにや!』

『えーと…どういう…』

『アア?なんだ?財布かこりや?』

と頭に *hatena* を浮かべていると

『アーニヤ、それでは言葉が少なすぎますよ』

と金髪の定員が現れた

『おふたりともいきなりすみません。実は――』

『つまるところはよオ。あの銀髪が祭り行つたつーのに財布忘れたから届けてくれってことだろオ?』

『そういうことです』

『だとよ。どうする大将?』

『ええいいですよ。僕達もお祭りに行くところですし』

『ありがとうございます』

――なんてことがあつた

「つって見つかんなきや意味ねえーよな…」

「うーん二手に別れますか?」

「あー確かにな。そっちの方がいいかもな」

と言つてムサシは歩き出す

「んじや俺はこっち行くからよ。大将はあっち頼むわ。俺の持つ槍でも目印に見つけてくれや」

「あ、はい!わかりました!」

そう言つて2人は分かれた

?

「あー見つかんねえな…お?なんだあれ美味そうだな!」

あれから分かれたムサシはシルを探すついでに…いや食べ物を

食べるついでにシルを探していた

「ジジイ！これ5つくれや！」

「ん？お？元気のいいあんちゃんだな。ちよいと待つてろ」

「おう！………ん？」

とムサシはある異変に気づいた

「ん？どうかしたかい？」

「ああいや。なんでもねえよ」

（また見られてんなア。しかも前の時よりだいぶ近エ。

それにしてもなんだアこの感覚。祭りの余興のモンスタータイムで使うモンスターじゃねエ）

「あいよ！あんちゃん！」

「お！あんがとよ！あ、あとジジイ！早めにここから避難しといたほうがいいかもしんねエぜ？」

「？おおそうかい」

そう言つてまた歩き出したムサシだった

ここはとある室内

外は祭りで賑わっているというのにそこには女三人男一人

合計4人の人…いやそのうち二人の女神、そして二人の人間がいた

（あら？あれは…フフ）

「ロキ」

「ん？なんや？」

「私はそろそろお暇するわ」

「はあ？まだ話は終わつたらんやろうが」

「ごめんなさいね。用事が出来てしまったの。オツタル行くわよ」

そう言つて女神はオツタルと呼ばれた男を連れて部屋を出ていった

「おい！フレイヤちよいま…。はあ、行つてもうたか…。まあいいか。こうなつたらアイズさんと祭りを楽しむだけやし」

ムサシの知らぬところでそんな一幕があつた